

成澤寺かわら版

第10号

発行日

平成28年4月17日

発行

山階高宗寺
成澤寺

六字名字は「心の雫」

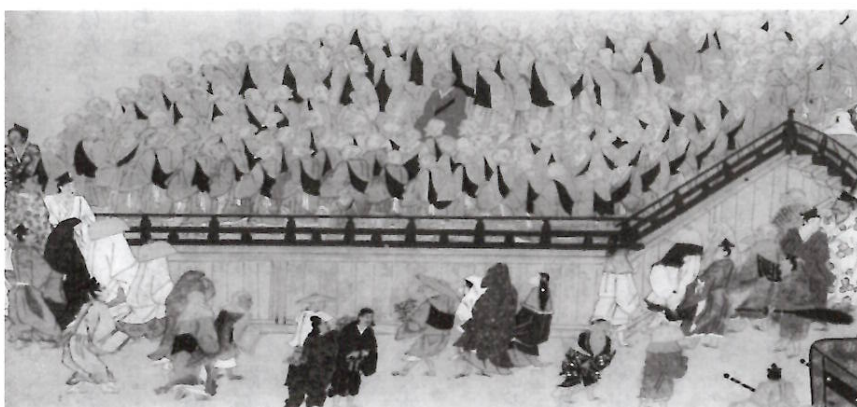
久慈勝浩

◆仏縁から遠い人たち

凶録『遊行上人絵』を拝見するチャンスを得た。そこに描かれた人や光景が、私の心や頭を動かす。思ったことを記してみたい。

一遍上人は、鎌倉時代の人。武士がいる。獵師や漁民がいた。これらの人々は、殺生の罪を負った暮らしをする。肉食にも通じる。

職業ではないが、盗人、追い剥ぎ、海賊、賭博打ちがいる。公的に逮捕されなければ、それで衣食を満たす根拠のない差別の下、生きねばならない人がいた。乞食、ハンセン病



信州善光寺で日中の念仏を御前の舞台で行う。中央が他阿

患者（当時は癩者）、せむしの人などである。自分から選んだ立場ではない。

昔、女性は成仏できないとされた。

血の穢れ（整理・出産）という観点からであろう。近い扱いでは、なめし皮業者がいる。往來で斃れた牛馬を片付ける。解体し、使える物を作る。血の穢れ、プラス死への忌み。

「非人」と呼ばれる要素だ。

当時、給料日は無い。一ヶ月後や一年後の生活を描ける訳がない。その日を無事過ごすので精一杯の人たちがいた。いわれなき差別で、肩身が狭い人々もいる。

◆何よりも救い

江戸時代のように、檀家制度が確立していない。御仏の教えに接する機会は、ごく稀であったろう。

阿弥陀仏の本願——。すべての人を救う。例外はない。前提として、我が名を称えよ。

官が認める僧侶という道。寺院に住み、学問としての仏教を究める。国家の安泰を祈って経を詠む。そして悟りを追い求める。

国家より先に、目の前の民が大切だ。民と同じ下層で僧として歩むぞ。そう決心したのが一遍上人である。仏教そのものを知らない庶民（衆生）を減らしていこう。難しい論理は、二の次だ。



時衆、大衆に飲食施す

我ら衆生の古里は西方浄土である。そこへ改めて還れるのだ。「さあ、南無阿弥陀仏と唱えようぞ」。上人の思いは、このようだったに違いない。



四条大橋を渡り念仏札を配る一遍

◆体に呼び掛ける

不謹慎である。御仏を称えるのなら、正座し心しずかにしなくてはならない。一遍上人以外の僧たちは、強く非難しただろう。

なぜ体を動かしながらの「南無阿弥陀仏」であつたのか？ 跳ぶ。跳ねる。踊る。大地を踏む。鉦を叩く。ひょうたんを叩く音が聞こえる。ひょうたんは、おそらく水筒の役割だったと思う。

コンサートでよく経験することがある。合唱しながら、一緒に歌いたくなる。演奏ならば、手や足でリズムをとりたくなっていく。心や頭が反応するのではない。その場の雰囲気、体を動かす。理詰めで語られると、人は一歩下がりがたくなる。不思議なものだ。正しくても拒否したくなったりする。

頭でつかちにならなくてよい。上人の思いは、これではないか。信じなくても、まず感じてもらいたい。

たい。御仏の教えは、ありがたいもの。その一端に触れる機会を作るのだと。

信仰心の芽は、体が作る。血がたぎり出す。血の巡る音が聞こえるような気分になる。心と頭が、体と連携し始める。

◆内なる力を汲み出せ

あくせくしなくてよい。せかせかしなさんな。

お金・名誉・社会的地位に狂奔し、一生を終える者がいる。その日を暮すのが精一杯の者もいる。いずれ大地に還る。浄土へ渡る。「南無阿弥陀仏」がある。安心せよ。

親鸞の「南無阿弥陀仏」。こっちは、衆生にとつて「心の杖」である、私は感じた。一遍上人のそれは、「心の雫」だ。私にはそう感じられる。学問的定説はわからない。二つの差を、そう思えるのだ。

(盛岡市在住・五十歳代)

本山と関東在住の檀家さん

- 一、宮様のお供のひとつがツ火の十二光佛入りで、本山も全山の役僧あげて謹んで法要を厳修された。皆様感激に包まれました。
- 一、七五三を本山でお参りを。
- 一、「娘さんの結婚式には呼んでくれ」とお上人さんから言われた。それまで死ななないからとお上人もこのようなご縁で元気を頂いているのかもしれない。
- 一、時宗の歴史を熱心に調べる人あり。本山と連絡密。
- 一、回忌の仏さんを本山で拝む。
- 一、静岡の人、本堂で拜んでもらった。
- 一、近くに家があるので、しばしば本山に行く。
- 友達いれば諸佛と同じ平等の位なり。生死一如。沢山の同胞・友達がいればいるほどありがたい。遠くにおられても篤信の志深く本山を、成澤寺を生かしてくれております。ありがたいことです。

住職 合掌